

第1問 次の文章を読んで、後の問い(問1〜7)に答えよ。

一九七〇年代から二〇一〇年代までの青年たちの精神の変化つまり、脱高度成長期に人間を形成した世代の精神を、かつて高度成長期を担った世代の精神と比較することをおして、わたしたちは、三つの分野での大きい変化を見出してきた。第一に、男女の性別役割分担(男は仕事、女は家庭)を基本とする「近代家父長制家族」の解体。第二に「生活満足度」とくに物質面における満足度の増大と、関連して、「結社闘争性」の鎮静、あるいは「保守化」。第三に、〈魔術的なもの〉の再生、あるいは、合理主義的な世界像のゆらぎ。

これら三つの全く異なった分野における変化は、たがいにとどのような関係にあるのだろうか。それとも(ア)グウゼンに同じ時代に進行した、無関係の三つの変化だろうか。

ここで第一の最も大きい変化「近代家父長制家族」の解体にもう一度立ち返ってみて、それがどうしてこの時代に起こったのかを考えてみよう。「近代家父長制家族」は、なぜ解体したのか、それはもちろん、それが男女の平等に反し、自由を(イ)セイヤクするものであるからである。あるいはそのように感じられはじめたからである。けれども日本は一九四五年の敗戦と、それにひきつづく「戦後改革」の時期にすでに自由と平等を理念とする社会として、出発したのではなかっただろうか。にもかかわらず、戦後復興とそれにつづいた長期の経済高度成長の全時代をおして、この型の家族は主流であり続けてきた。A一九七三年になお、この型の家族は青年の最大の理想であった。

ちなみに(中略)この型の家族は日本だけでなく、ヨーロッパ、アメリカを含む古典期近代社会一般の基底を構成する細胞であった。幾何学の方法論では、一見無関係に見える補助線を適切に一本引くことによって、図形の本質が見えてくることがある。ここでは一つの補助線として、アメリカの軍隊を考えてみよう。

アメリカ社会は、建国以来、自由と平等という理念を高く掲げ広く共有されている社会であった。けれども軍隊においては、規律と命令系統とが生命であり、そこでは自由も平等も、理念として信じられてはいるが、現実の実行原則としては当然「封印」されざるを得ない。

「封建的」ということは、自由と平等の正反対を示す言葉としてよく使われる。封建社会は、Bなぜ「封建的」であったのか。日本でいえば源平から「戦国時代」を(ウ)テンケイとして「士農工商」に至るまで封建時代とは、武士の支配した時代である。戦う集団の緊迫の中で、規律と命令系統は生命であり、自由も平等もそこでは抑圧されざるを得ない。自由と平等の抑圧の代名詞とされる「封建的」なモラルとは、戦う集団の戦闘合理性から生まれたものである。

マックス・ウェーバーが正しく言うように、生のすみずみの領域までも「合理化」、生産主義的、C手段主義的な合理化(「目的合理性」ということが近代社会の原理であるのは、近代社会が個人と個人、集団と集団、人間と自然との(エ)ソウコク性(戦い)をその原理とする社会であるからである。

たとえば受験生は受験戦争に勝つために現在の生きる時間を、未来の目的のための「手段」と考えて、生活のすみずみまでも合理化し、自分で自

分の自由を抑圧することがある。戦争が終結すれば、この「合理化圧力」は解除され、自由に〈現在〉の生を楽しむこともできる。これは近代から脱近代に至る歴史の局面の、分かりやすい理論モデルである。

同型のことは、個人、集団、社会のさまざまな水準で起こる。企業間の自由な競争がはげしくなれば、企業は競争に生き残るために、企業内部を「合理化」し、規制を強化し、人員を削減し、労働を強化し、個々の社員の自由は抑圧される。「競争」と「合理化」を中間項とする、D自由の反転。

戦後復興期から高度成長期をとおして、日本の家族は戦う集団であった。戦後日本の若い新しい家族たちは「茶づ台代わりのみかん箱一つ」の生活から出発して、炊飯器を手に入れ、冷蔵庫を手に入れ、テレビを手に入れ、部屋を手に入れ、自動車を手に入れるために闘い続けてきた。高度経済成長期の「モーレツ社員」「企業戦士」たちを支えたのはこの家族だった。女たちは男たちの戦いのE後顧の憂いなきよう、人間と生活の再生産(家事と育児)を引き受け、愛情一本チオビタ・ドリンクなどを飲ませて、夫を毎朝戦場に送り出してきた。炊飯器を手に入れ、冷蔵庫を手に入れ、クーラーを手に入れ、部屋を手に入れ、自動車を手に入れた現在、経済成長課題はすでに達成され、生活の物質面はすでに充ちたりてみれば、これまでの服従と役割分担は、考えてみれば何の根拠もないものとなる。

「近代家父長制家族」とは、夫の経済力に対する妻の全面的、生涯的な信頼と依存、妻の生活処理能力に対する夫の全面的、生涯的な信頼と依存を前提とするシステムであり、強力にモノガミ的(二夫一婦制的)なモラルを形成し、またこのモノガミ的なモラルに支えられて初めて完全に生きられる。

この人生の根幹の安定をおびやかす恐れのある婚姻外的な性関係は、不吉なもの、許しえないもの、反倫理として感覚される。生涯的な相互依存と相互拘束のモノガミ制の関係の絶対性が解体すれば、婚姻前提の生産主義的な性のモラルも絶対性を失うこととなる。

「近代家父長制家族」の本質は、人間の生の全領域の生産主義的な手段化(instrumentalism)、という仕方での合理化の貫徹であった。それはリビドーの生産主義的な管理経済システムとして、productiveな性、未来に責任をもつて育成する体勢(婚姻)によって担保されている性のみを許容する。一見無関係であるように見える、近代家父長制的な家庭の理想像の解体と、婚姻主義的な性のモラルの解体が連動するのはこのためである。

生存の物質的な基本条件の確保のための戦いの強い、生産主義的、未来主義的な〈合理化〉の圧力による、男女の平等の封印も性の自由の封印も、この戦いの勝利と共にその根拠を失って失効し、平等を求める女性たちの声、自由を求める青年たちの声の前に、「近代家父長制家族」のシステムとこれを支えるモラルと感覚の総体は、音を立てての崩壊を開始する他はない。

四〇年間の青年たちの精神の変化を追跡してきた調査が見出した三つの大きな分野における変化。――①「近代家族」のシステム解体と、関連して婚姻主義的な性のモラルの解体、②「生活満足感」の増大と、「保守化」、③「魔術的なもの」の再生、は、一見たがいに無関係のもののように見えるが、この節で見てきたように、経済成長課題の完了、これによる合理化圧力の解除、あるいは減圧、ということによって、一貫した理論スキームの中で、明晰に全体統合的に把握することができる。

(中略)

くりかえし確認してきたように、近代の根本理念は〈自由〉と〈平等〉ということであった。他方確認してきたように、F近代の現実原則は〈合理化〉ということであった。社会のすみずみ、生のすみずみの領域までも、生産主義的、未来主義的、手段主義的な合理性の浸透ということであった。手段主義的とは、現在の生を、それ自体として楽しむのではなく、未来にある「目的」のための手段として考える、ということである。「レクリエーション（再創造）」という言い方がよく示しているように、現在の生をそれ自体として楽しむべき活動さえも、将来の労働のためのエネルギーの補充（再創造）のようなものとして正当化されてはじめて安心して楽しまれるという倒錯が、日常の生の自明の感覚となる。この感覚が、社会と集団と個人のあらゆる水準のシステムにしみわたっていくのが近代である。あるいは成熟しつくした近代の（ウ）テンケイ像である。

（中略）

近代とは（中略）、人間という種の歴史の第Ⅱ局面、爆発的な増殖という局面の最終ステージであった。第Ⅱ局面の二千数百年をとおして、人間は自然を征服し、互いに他を征服して、生存の物質的な基本条件を獲得してきた。全地表にひろがりつくした増殖の果てに、高度産業社会とよばれる人類の一定部分は、この生存の物質的な基本条件の獲得という目的を、真に切実な課題としてはほぼ達成し、生産主義的、未来主義的、手段主義的な「合理性」への圧力の一挙の減圧という局面を、史上初めて迎えることになる。この圧力によって要請されてきたさまざまな価値観とイデオロギーとシステムと人間観とモラルと感覚が、一つまた一つ、解体を開始してゆくことを、わたしたちは、これから見てゆくことになるだろう。

それは「近代」の基本原則が、生産主義的、未来主義的、手段主義的な〈合理化〉の、生のすみずみの領域までも浸透という原則が、根拠を失って失効することであるから、わたしたちはこの新しい高原の局面を、近代の後の時代、と見ることが出来る。けれどもそれは、「近代」の根本理念が、この合理化の圧力による〈封印〉を解凍されるということであるから、それは「近代」の初心の理念が、自由と平等が、初めて現実の社会において、実現する道を開かれる局面でもある。

（見田宗介『現代社会はどこに向かうか 高原の見晴らしを切り開くこと』一部改変）

問1 傍線部(ア)～(エ)の漢字と同じ漢字を含むものを、次の各群の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選べ。解答番号は

1

4

1

(ア) グウゼン

- ① この会社はタイグウがよい。
- ② 父は神社でグウジをしている。
- ③ この話は世界中で広く知られたグウワである。
- ④ 遺跡からドグウが出土した。
- ⑤ 自分のグコウを恥じる。

2

(イ) セイヤク

- ① 売買がセイヤクした。
- ② 入学する学校のセイフクを買った。
- ③ 会員になるにはセイヤク書にサインをする必要がある。
- ④ この器の詳しいセイゾウ方法はわかっていない。
- ⑤ 時計を見て、セイカクな時刻を知る。

3

(ウ) テンケイ

- ① 芸術作品をテンジした。
- ② キテンを利かして、難局を乗り越えた。
- ③ このキョテンを敵にとられてはいけない。
- ④ 今日は、セイテンだ。
- ⑤ この言葉のシュッテンを明記してほしい。

(エ) ソウコク

- ① 苦手な科目をコクフクする。
- ② フツコクした書籍を購入する。
- ③ 写真とコクジした人を見かける。
- ④ わずかばかりのザツコクを食べる。
- ⑤ 列車がキョウコクを渡る。

④ 理想の家族像（％）

項目	1973年	2013年
A	6	18
B	29	17
C	40	7
D	24	58

① 理想の家族像（％）

項目	1973年	2013年
A	5	18
B	29	17
C	7	40
D	58	23

⑤ 理想の家族像（％）

項目	1973年	2013年
A	18	17
B	27	26
C	20	20
D	35	37

② 理想の家族像（％）

項目	1973年	2013年
A	18	5
B	17	29
C	40	7
D	23	58

③ 理想の家族像（％）

項目	1973年	2013年
A	17	18
B	26	27
C	20	20
D	37	35

各項目の内容	
A	「夫唱婦随」父親は一家の主人としての威厳をもち、母親は父親をもちたてて、心から尽くしている。
B	「夫婦自立」父親も母親も、自分の仕事や趣味をもっていて、それぞれ熱心に打ち込んでいる。
C	「性別役割分担」父親は仕事に力を注ぎ、母親は任された家庭をしっかりと守っている。
D	「家庭内協力」父親はなにかと家庭のことにも気をつかい、母親も暖かい家庭づくりに専念している。

問3 傍線部B「なぜ『封建的』であつたのか」という問いに対する回答として最も適当なものを次の①～⑤のうちから一つ選べ。

解答番号は 6

- ① 自由と平等を抑圧しているから。
- ② 規律と命令系統が優先されたから。
- ③ 目上の人には逆らえない社会だったから。
- ④ 「士農工商」という身分制度が一般的だったため。
- ⑤ 武士という戦う集団の合理性のため。

問4 傍線部C「手段主義的な合理化」に当てはまる考えを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は

7

- ① 勉強が好きだから塾に行く。
- ② お金を払ったから塾に行く。
- ③ 行かないと親に叱られるから塾に行く。
- ④ 将来よい職業につきたいから塾に行く。
- ⑤ 先生が好きだから塾に行く。

問5 傍線部D「自由の反転」の説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は

8

- ① 競争の自由を大切にすること、不自由な状態を招くこと。
- ② 競争の自由を大切にすること、不平等な状態をつくり出してしまうこと。
- ③ だれかの自由を抑圧することで、他の人が自由になること。
- ④ だれかの自由を抑圧することで、平等な状態をつくり出すこと。
- ⑤ 自由を大切にすること、競争が激しくなること。

問 6 傍線部 E 「後顧の憂いなき」に最も近い意味をもつ四字熟語を、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は

9

- ① 疑心暗鬼
- ② 虚心坦懷
- ③ 一喜一憂
- ④ 三顧之礼
- ⑤ 勇猛果敢

問 7 傍線部 F 「近代の現実原則」に当てはまらないものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は

10

- ① 目的を果たすために何かをするのではなく、それをする事自体を目的とする。
- ② より豊かな生活を実現するために、一人ひとりが生産性をあげる努力をする。
- ③ 物事を進めていくときは、事前に計画をしっかりと立て、それにそって行動する。
- ④ 家族内では、父親、母親、兄弟姉妹に関係なく、意見を言い合うことを大切にする。
- ⑤ 電化製品などをそろえることよりも、資産運用を考え、老後の生活に備える。

第2問 次の文章を読んで、後の問い（問1～7）に答えよ。

グローバル社会を生きる日本人にとって必要なのは、ロジックとAハラ芸の二刀流です。家族や友達とプライベートな会話をしているときに、ロジックを使うのは、やはり理屈っぽくて、堅苦しく、かえって人間関係がギクシャクします。明治の知識人がそう（ア）キトしたように、日常生活ではハラ芸を使いながら、公の場では、グローバル社会のB方便、すなわち「知的護身術」として、意識的にロジックを使うのです。

おおまかにまとめるなら、公の場で話したり書いたりするときは、ロジックを用います。話すときは「ですます調」、書くときは「である調」にすればいいだけです。伝統的な日本のハラ芸を使うのは、タメ口で話すときだけ、と考えていいでしょう（もちろん、英語では、たとえ口語や俗語でも、ロジックを使います）。

（中略）

とはいえ、「である調」でロジカルに日本語を書く機会は、まずほとんどの人にはありません。硬い評論文——新聞の社説や雑誌、書籍など——を「読む」機会なら、毎日のようにあっても、「書く」のは、せいぜい、大学受験での小論文か、大学でのレポートや論文くらいです。

インターネットが（イ）フキウした現代の日常生活において、日本語をロジカルに「書く」機会があるとすれば、現実には、ほとんど電子メールだけと言っていいでしょう。もともと、メールの文面も「ですます調」ですから、実際には「話す」として何も変わりません。Cところが、このメールが、くせものなのです。

数学者の藤原正彦さんは、『国家の品格』（新潮新書）の中で、日本の文明の特徴として、「情緒」と「形」を挙げておられますが、その最たるものが「手紙」と言えるかもしれません。

日本語の手紙は、前文、主文、後付けの順番で構成されます。前文ひとつ取ってみても、「拝啓」などの「頭語」、次に「時候のあいさつ」、「（ウ）アンピ」を問い、繁栄を喜ぶ言葉、「平素お世話になっておるお札」と、細かくその順序が決まっています。

そもそも、日本人にとっては、「手紙を出す」という「行為」、すなわち「形」そのものに大きな意味があります。たとえば、五月であれば、頭語と時候のあいさつは、「拝啓 新緑の候 皆様ますます（エ）ゴケンショウのこととお喜び申し上げます」です。相手が会社経営者で、そのやりくりに苦しんでいることを知っていても、あえて形式的にそう書きます。それでも、心は伝わります。忙しいさなか、わざわざペンを走らせ、手紙を書いてくれた。「がんばってください。元氣を出してください。応援しています」という心を、「手紙」という「形」に乗せて伝えるのです。これもまた、日本人の「察し」であり、ホンネとタテマエの使いわけです。

もちろん、最近では、メールが主流となり、手紙を書く機会は、ほとんど絶滅してしまいました。だからこそ、手紙という「形」の持つ重みは、いっそう大きくなっていると言えるかもしれません。お礼や謝罪、借金の申し込みなどは、本気であるなら、メールではなく、手紙にした方がよい、と考える日本人は、今でも多いものです。下手な文字でも自筆で手紙をしたため、ポストに投函するという行為そのものが、文字通り「ものを言う」

のです。

実は、この手紙に関して、僕自身が痛い経験をしました。ちくま新書の現編集長と、はじめてお目にかかった時のことです。大阪のあいりん地区に取材があるとのことで、新大阪駅近くのホテルでお会いすることになりました。僕は、神戸でしか手に入らないクッキーをおみやげにたずえ、新大阪に向かいました。そして、長時間にわたり、有意義なお話をした後、喜んで帰路につきました。もちろん、帰宅してすぐ、お礼のメールを送信しました。すべて「形」に則った行為です。

ところが、編集長からのメールが届きません。確か、土日をはさんでの出張でしたから、「それなら月曜には返信があるだろう」と思っていたところ、月曜になっても、火曜になっても、メールが届かないのです。正直、これには僕もカチンときてしまいました。それなりに付き合いの長い著者が（最初の出版からなら約十年）、手土産まで持つて片道二時間の道のりを出かけていったのに、ホンネはどうあれ、形式的に失礼ではないか、と。ところが、その翌日、郵便受けを開いてみると、なんと、実に丁寧にしたためられた編集長からの直筆の手紙が入っていたのです。a（ ）。

（中略）

現代日本人の生活において、メールは、英語的コミュニケーションと日本語的コミュニケーションが、もつともいびつに入り混じってしまったものだと思います。すなわち、英語の「ロジック」だけでも、また日本語の「形と情緒」だけでもない「文化ミクスチャー」です。

スウェーデンの社会経済学者グンナー・ミューダールは、『アジアのドラマ』の中で、アジアの国々が近代化過程において直面する「制度と態度」の問題を論じています。ミューダールによれば、「制度と態度」は文化と密接に関わっており、「慣性」を持った大きな障害となつて、近代化を阻みます。

電子メールの書き方が、グローバル・スタンダードである英語のロジックに基づくものであることは言うまでもありません。インターネットがアメリカで生まれたものである以上、それは当然の帰結なのですが、伝統的な日本の「形と情緒」が、まさに慣性を持った障害となつて、今日の文化ミクスチャーをもたらしているわけです。

平成二十七年（二〇一五年）に、僕が書籍を出版した時のことです。ちょうどその年、僕は自社制作によるDVD教材をリリースしており、編集部のご厚意で、チラシ（広告）の投げ込み^{（注1）}をお願いすることになりました。ただ、最後の最後まで、僕は決断をためらっていて、図1のようなメールを担当の編集さんに送りました。

改めて読み返してみると、僕の文面は、b（ ）。「頭語」や「時候のあいさつ」こそないものの、主文に入る前に、きちんと「平素お世話になっていろいろお礼」を述べています。形式的な「前文」です。また、メールの最後に、「大変な乱文である」と、謙遜もしています（何度も推敲し、失礼のないように書いた文面であることは、言うまでもありません）。

実は、僕の中では、これはチラシの投げ込みを正式に依頼するメールでした。「ただ」と譲歩し、躊躇を伝えてはいますが、「基本的にはお願いする方向で考えております」をクレーム^{（注2）}にして書いたつもりでした。もちろん、「躊躇がないわけではありません」は、タテマエです。メールの最

後で、チラシの納入先や納入部数、納入期日についても問い合わせしており、婉曲的ではあるものの、このホンネとタテマエは、十分に伝わっていると思います。

c ()、このメールに対する担当さんからのお返事は、「こちらに迷惑ということは、まったくありません。○月○日までにお知らせいただければ、間に合います。ゆっくりお考えになってください」でした。d ()、ホンネとタテマエを逆に受け取られてしまったのです。

差出人：	横山雅彦
☐ 宛先：	〇〇さま
☐ CC：	
件名：	チラシの投げ込みの件

〇〇さま

大変お世話になっております。

チラシ投げ込みの件、いろいろとお気遣いいただき、本当にありがとうございます。

いろいろ悩んだ末、基本的にはお願いする方向で考えております。ただ、DVDが完全に大学受験のリーディングに特化したものであるのに対して、ちくまプリマー新書の読者が一般の方であることを思い合わせると、やはりまだ躊躇がないわけではありません。〇〇さんの忌憚ないご意見をお聞かせいただけたら、幸いです。

チラシは、先日お話しした株式会社〇〇の〇〇さんが制作し、印刷の手配もしてくださるとのことです。チラシの納入先、およびお納めする部数と期日をお知らせいただけますでしょうか。最後までいろいろとご面倒をおかけし、大変心苦しく思っております。

取り急ぎ、お詫びとお願いまで申し上げました。
大変な乱文です。何卒よろしくご判読ください。

図 1

(横山雅彦『「超」入門！ 論理トレーニング』一部改変)

注 1 チラシ（広告）の投げ込み — 製本した本にチラシ（広告）を挟み込むこと。
注 2 クレーム — ここでは「要件」という意味でつかわれている。

問1 傍線部(ア)～(エ)の漢字と同じ漢字を含むものを、次の各群の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選べ。解答番号は

11

～

14

11 (ア)キト

- ① 友人はいつもキゲンがよい。
- ② 創立15周年のキネン式典に参加する。
- ③ 相手の活躍をキネンする。
- ④ 良いキカクを立案する。
- ⑤ 被災者に衣類をキフする。

12 (イ)フキュウ

- ① 生物がいずれ死ぬのは、フヘン的な事実だ。
- ② フシヨウながら誠心誠意努力します。
- ③ フカ価値を高めることが重要だ。
- ④ 現在では、フケイよりも保護者という表現がよく用いられる。
- ⑤ 今年のホウフを述べる。

13 (ウ)アンピ

- ① ヒガンを達成した。
- ② キヨヒ的な反応を示す。
- ③ 欠席者のヒリツが高い。
- ④ スマートフォンをヒツウチ設定にする。
- ⑤ ヒクツな態度をとる。

14 (エ) ごケンシヨウ

- ① 粘り強いコウシヨウを続ける。
- ② ゴシヨウですから、これ以上はご勘弁ください。
- ③ 取引先とのセツシヨウを重ねる。
- ④ 応援しているチームのシウリツが高い。
- ⑤ 仮説をシヨウメイする。

問2 傍線部A「ハラ芸」が用いられる場面の最も端的な例として筆者が挙げているものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は

15

- ① 公の場で話すこと
- ② 手紙を書いて送ること
- ③ レポートを書くこと
- ④ 苦しんでいる人に「がんばってください」と声をかけること
- ⑤ 丁寧な電子メールを送ること

問3 傍線部B「方便」に最も近い意味の言葉を、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は

16

- ① 理屈
- ② 直情
- ③ 便宜
- ④ 隠蔽
- ⑤ 防衛

問 4 傍線部 C「ところが、このメールが、くせものなのです。」の説明として最も適当なものを次の①～⑤のうちから一つ選べ。

解答番号は 17

- ① 電子メールが多く使われるようになったことで、日本の文明を最も象徴するものといえる「手紙」が廃れてしまう。
- ② 電子メールでは心が伝わりづらいため、日本人のコミュニケーションの希薄化が進んでしまう。
- ③ 電子メールの書き方は英語のロジックに基づくものであるため、日本人のコミュニケーションが英語化してしまう。
- ④ 電子メールは手紙と違って「形」を持たず、「慣性」をもった大きな障害となるため、厄介である。
- ⑤ 日本人の電子メールのやりとりには、ロジックとハラ芸がいびつに入り混じっているため、時としてメッセージの誤解が生じてしまう。

問 5 a () に当てはまる文章として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。 解答番号は

18

- ① まさに、一本取られた気分でした
- ② 返信が遅すぎると思いました
- ③ 編集長が何を思ったのか、まったく理解できませんでした
- ④ 編集長に対して、さらに怒りがこみ上げてきました
- ⑤ そこには、編集長からの心のこもったお礼が書かれており、心温まりました

問 6 b () に当てはまる文章として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。 解答番号は

19

- ① 手紙の書き方そのものです
- ② まさに文化ミクスチャーです
- ③ 完全にロジックに基づいています
- ④ メールの後半まで読まない要件が分らず、丁寧ではあるものの、読みづらいです
- ⑤ 躊躇があったにも関わらず、端的に要件が伝わるものになっています

問 7 c ()、d () に入る語句の組み合わせとして最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。 解答番号は

20

- ① c として、d つまり
- ② c ところが、d したがって
- ③ c ところが、d つまり
- ④ c として、d したがって
- ⑤ c ところが、d かし

2025 年度 一般選抜Ⅱ期 国語「現代の国語」及び「言語文化（古文、漢文を除く）」

問題番号	設問		解答番号	正解
第 1 問	問 1	ア	1	4
		イ	2	2
		ウ	3	5
		エ	4	1
	問 2		5	2
	問 3		6	5
	問 4		7	4
	問 5		8	1
	問 6		9	2
	問 7		10	1
第 2 問	問 1	ア	11	4
		イ	12	1
		ウ	13	2
		エ	14	4
	問 2		15	2
	問 3		16	3
	問 4		17	5
	問 5		18	1
	問 6		19	2
	問 7		20	3